

## ゴンマ聖墓巡礼考

石原 美奈子

### 1. はじめに

筆者がエチオピアの中西部イルバプール州ゴンマ地区の調査を開始して9ヶ月が経った。ここは現在オロモ第4行政区に含まれ、人口の大半をオロモの人々が占めている。ゴンマ地区は、16世紀に移動してきたオロモの人々によって18世紀に建国されたリンム王国、ジンマ王国、グマ王国、ゲラ王国を含むギベ5王国のひとつである。ゴンマ地区は他の4地区同様、コーヒー生産地として知られ、人口の80%は農村地区に住んでいる。

ギベ5王国が伝統的なガダ（年齢階梯制度）にもとづく政治および宗教制度を放棄し、イスラームを導入したのは、18世紀の王国形成後のことである。筆者の関心は、イスラームが王国の形成と確立とどのように結びついて発達してきたか、という点にある。

試行錯誤の末、調査のスタイルが整った。ゴンマ地区の行政府所在地アガロを拠点にして2人の助手を伴い、各地に散在するムスリムの聖者の墓を巡礼に回った。本稿ではこれまでの聖墓巡礼を経て得られた近年の聖者信仰の実態と変化について報告する。

### 2. ワルコ

聖者ワルコの墓は、ヤチ町から徒歩1時間ほどのクッパ（聖墓）村にある。ワルコは、ゴンマ王国の創始者アッバ・ボケの祖父にあたり、また13世紀の大聖者シェイフ・フセインの子孫でもある。

ワルコがこの村で死没した確証はないが、96年前にシェコタ・クダ（クダ村のシェイフ）がワルコがクッパ村で死没したと語り始めてから聖墓が建設された。聖墓建設以前も、このあたりは人や家畜の病気を治す聖地として知られていたという。

ワルコの墓をめぐる不可思議な逸話は尽きない。アツピヨ・ボレ（ボレ村のシェイフ）もその恩恵を受けたひとりである。このシェイフは生前、ワルコの聖墓を訪ね、その門前にたどり着いた時、ワルコがマアナ（霊）の姿で立ち上がり、シェイフの胸に手を当てて、一瞬にしてコーランの知識を授けたという。

我々が5月3日、はじめてワルコ聖墓を訪れたとき、そこには先客があった。バレ州から巡礼にやってきたその客人ハッジ・ウォラガリは、やはりシゲフ・フセインの子孫であった。弁舌の巧みなハッジは聖墓管理を務める沈黙がちなアッバ・マチャを差し置いて我々をえらく歓迎してくれた。5月6日（木）の夜、ワルコのハドラ集会に出席する機会を得たとき、ハッジは独特の声量とパフォーマンスで大演説をぶった。その主旨は、アッバ・マチャの聖者であることをアピールすることと共にエチオピアの中でゴンマ地区をとくに選んで調査にやってきたファレンジ（外国人）の労を称えることであった。ハドラ集会に出席した老若男女は、興奮の極致に達して多くが号泣した。

このハドラ集会で特に印象的だったのは、この

演説と、最後に行なわれた踊り（ワール）である。シェイフ・フセインを称える即興のマンズマ（詩歌）に合わせて手を叩き、上下に跳ね上がる動作を繰り返すオロモの人々独特のその踊りは、最初のうち、参加者が少なかった。冷めた気分で部屋の壁際に固まって座っていた若者を叩き起こしたのは、やはりこのハッジだった。「若者が何をしている、お前達の文化だろう」とハッジは若者に語りかけた。

ハッジは、あたかも聖者信仰と「文化」の衰退傾向に歯止めをかけ、その活性化のためにやってきたかのようであった。それにしても、この衰退現象は筆者の印象に過ぎないのだろうか。

### 3. 預言者ムハンマドの足跡

5月10日、「我々はメッカ巡礼を行なった」フィールド・ノートにはこう記した。肝心なのは意図（ニーヤ）である。

我々は「ムハンマドの足跡」を探し回った。メッカ巡礼に匹敵するほどの価値のある場所なら必ずみつかると、詳しい位置も聞かずに来た。ところが、通行人に聞いても誰も知らない。さんざん苦勞してみつけたそれは、周囲を見渡す丘の頂上にあった。目印は2本のユーカリの木だけである。

足跡は、大きな岩の上であり、長さおよそ32cmほどあった。右足で、南の方を向いていた。エチオピアにおいてメッカは北の方にあたるので、ちょうどメッカからエチオピアに向かう形になる。岩の周囲を観察してみると、地面には焚火と建物の柱の跡が残っていた。

このあたりには、旧メンギスツ政権が各地で村落化計画(villagization)を進める以前、村とモスクがあった。村落化政策が遂行されてひとつの村がまるごと移される過程で、モスクも破壊されたが、足跡はそのまま残された。これまで巡礼の足が途絶えることのなかったこの貴い足跡も今は忘れられつつあるという。

社会主義を掲げる旧メンギスツ政権は、宗教の統制化につとめた。多くのモスクが破壊され、マ

ドラサ（コーラン学校）は閉鎖された。人々の人気・尊厳を集めるシェイフの中には逮捕されたり、処刑されたりした者もいた。チャット（覚醒作用のある植物）を抱えてハドラ集会に向かう人々は、自治組織カバレから警告を受けた。

聖者信仰にとっても試練の時代であった。多くのインフォーマントがこの17年間で人々の宗教に対する欲求が減じたと指摘した。人々はカバレの集会、婦人組合の集会、青年組合の集会、と集会続きで「食事にもありつけない」ほどであった。ハドラ集会や巡礼に行く暇などであろうはずもなかった。移動不可能な聖墓は村落化政策で村から遠く離れてしまい、人々の必要性を満たすことができなくなった。

### 4. ワハビーの町

聖者信仰は、旧メンギスツ政府主導の政策によってのみ阻まれたわけではない。

筆者は聖墓巡礼をする過程で、村人からさまざまな疑いをかけられた。そのほとんどが、ワハビー（いわゆる原理主義者）と関わりをもってしているのではないかと、いうものであった。

ワハビーは、いまだ集団を構成し政治的勢力をもつというよりも、個人的立場に留まっている感がある。旧メンギスツ政権時代、私的所有財産、とくに商人の財産が「国有化」と称して没収されると、ムスリム商人の多くがアラブ石油産出諸国に流出した。そして、その多くが当時アラブ諸国で流行していた原理主義的風潮に感化されて帰国してきた。宣教を主たる活動とし、会員にはサウジアラビアから支援金を送られていると、一般的に信じられている。

ワハビーの主たる攻撃対象は、聖者信仰である。ワハビーの主張によれば、唯一神アッラーと人々を仲介する聖者ワリーに対する信仰は不必要である。信者がシェイフを囲んで、コーヒーを沸かし、香を焚き、チャットを噛みながら祈りをあげるハドラ集会を宗教上の誤りとして否定する。預言者ムハンマドさえ「人間」としてマウリド（預言者ムハンマドの誕生祭）祝祭を否定する。

ワハビーがとくに多いとされているのは、グマ地区のデンビヤトッパなどの町である。トッパにある大きなモスクは、1978年に人々の共同出資金とサウジアラビア在住のあるシェイフの援助をもって建設されたモスクである。デンビにも同様な大モスクが建設される計画である。

6月5日、人と会う約束があって、デンビ町に向かった。デンビは交通の便の悪い町である。商人たちがタクシー代わりに使うピックアップ車などの交通機関はめったに捕まらない。

デンビ町から1時間ほどのソワ村に住むシェイフと、町のモスクの前でズフル（昼の礼拝）の時に会う約束をしていた。正午前に着いた我々はモスクの門の前で午後2時半まで待った。結局このシェイフは約束を果たさず、現われなかった。しかし、デンビのモスクの門の前で待っていて学んだことがひとつあった。

他のモスクならば、ほぼ同時に礼拝を済ませてくるが、このモスクは人々が三々五々バラバラに出てくる。助手を務めるカーディルは、礼拝を済ませて、その異様さをこう表現した。

この町はワハビーかぶれだ。礼拝の仕方だってアガロのモスクと随分違う。人々はスンナ（預言者のムハンマドの慣行）の礼拝をしないし、礼拝の後で行う祈り（ドゥア）も挙げない。自分たちだけ礼拝を済ませてさっさと出ていってしまう。

アガロ町に住むワハビーかぶれとして知られるあるシェイフに、聖者信仰について聞いてみた。答えは否定的だった。

人々は自分の祖先を大人物として誇張して聖者ワリーとかシェコタとか呼んで奉るが、こうした文化は消滅しつつある。タリーカ（神秘主義教団）だってもう衰退している。

このシェイフにとって、唯一神アッラーへの礼拝のみが重要とされ、聖者信仰をめぐる一切の慣習及び儀礼は時代錯誤的な文化と位置づけられ、否定されている。

## 5. おわりに

本稿では、調査の一過程でおこなった聖者巡礼から観察された聖者信仰の実態と変化の状況について、旧メンギスツ政権の諸政策とワハビー思想の蔓延の二側面から記述してきた。

シェイフとは、教育や病気の治療のみならずムスリムの人々の生活のあらゆる場面で必要とされてきた。シェイフを囲み、チャットを囁みながら祈り（ドゥア）を挙げるハドラ集会は、信仰活動の中心にあった。

このような中心性をもつ聖者信仰の衰退は大きな変化であるといわざるをえない。だが、本当に聖者信仰は「衰退」しているのだろうか。

聖者信仰は、人々の心の中で生きているといえないだろうか。思想や信仰が多様化してきて、聖者信仰が唯一の選択肢ではなくなってきているのではないだろうか。

この地域に住むムスリムの人々の価値観の変化と思想や信仰の多様化との関わり合いの考察が、今後の調査の課題となるであろう。

（いしはら みなこ 東京大学）